

氏名	末永高康
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	文博第129号
学位授与の日付	平成11年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科哲学(中国哲学史)専攻
学位論文題目	中国古代天人論考

(主査)

論文調査委員 教授 池田秀三 教授 麥谷邦夫 教授 川合康三

論文内容の要旨

諸子対立の時代から、儒家一尊の時代へ、この思想史の流れの転換点の中心に立つ思想家が董仲舒である。彼は、この転換点に立ち、天人論の領域においてひとつの「転換」を行ったとされている。「天人の分」から「天人相関説」へという「転換」である。天象と人事、両者の間に因果関係を見出すことを禁じた荀子。その天人の分の思想に対して、天象と人事との間に必然の因果関係を見出す董仲舒。両者の差異はわれわれの目に際だったものとして映る。そして、この差異は、両者が前提とする「天」の観念やその背後にある自然観を問題とする時、さらに際立つことになる。意志を持たず人事に介入することのない荀子の「天」と、意志を持って人事に介入してくる董仲舒の「天」。このようなかたちで両者の「天」を整理する時、そして、そこから荀子の自然観を自然現象の内に意図を認めないもの、董仲舒の自然観を自然現象の内に意図を認めるものと整理する時、前者から後者への「転換」は、ほとんど正反対への逆転であるかのように感じられるのである。それゆえ、この天人の分から天人相関説への「転換」の理由を説明することは、中国古代思想史上のひとつの大きな課題であった。本論もまた、この課題に取り組むものである。ただし、その取り組みは課題の解決というよりは、課題の解消という方向に向かうことになる。荀子の天人の分の意味するもの、董仲舒がその天人相関説を語るに際して行っていることを再検討するならば、この課題設定自体が問題を孕むものであることが知られるからである。この課題設定が孕む問題を明らかにしながら、天人論における董仲舒の「転換」を描き直すことが本論の目的である。

この目的を果たすためには、単に荀子・董仲舒の両者の天人論を比較するだけでは不十分である。彼らと同時代、彼らに先立つ時代の天人論や、その天人論と不可分な形で展開される性論をも視野に入れて論じられなければならない。よって、本論は、孟子の性善説より説き起こすことになる。以下、本論の章立てに従ってその要旨を述べることにする。

第I編第一章《孟子の性善説》——本章では先秦における「性」の語義を推定し、孟子の性論を再検討する。

先秦文献には「性善」「性悪」なる断定は存在しても、「善性」「悪性」なる語は見えない。「性」の内容を示す語によって「性」字が修飾される形の熟語からして、先秦文献にはほとんど見られないのである。よって、善や悪として発現する「善性」「悪性」に相当するものを持ち込んで、孟・荀の性説を理解するのは必ずしも適切とは言えない。彼らが持っていた「性」の語のイメージはなにか素質的なものとは異なるものだったのである。そこで先秦の思想家が与える定義より考えるならば、「性」とは「生」、すなわち「生のあり方」であり、同時に、そのような「生のあり方をさせているもの」であることがわかる。後者は前者の背後に実体化されたものであり、両者は表裏をなす。ここで「人の性」を考えるならば、それは「人の類において共通な生のあり方」であり、そのような「生のあり方をさせているもの」ということになる。孟子の場合、彼は、人々の耳目が共通なものを好むことに注目し、そこから、人々の心が好むものを共通であるはずだとして、この共通なもの(=仁義)を好むことを「人の心の性」と規定し、これを「人の性」の中心に据える。こう規定される以上、この人々の心が共通に好むものは、(人の心にとって)善なるものと言わざるを得ず、また、この善なるものを好むのが「人の(心の)性」である以上、「人の性」は善であると言わざるを得ないことになる。これが孟子の「性善」の主張である。

しかるに、この「人の性」は人々の現実における生のあり方の内にそのままあらわれているわけではない。そこで、彼は、「思い」「求める」ことによって、この本来あるべき「人の性」に立ち返ることを求めるのであるが、このような立場は、人々の現実における生のあり方をそのまま「人の性」であると見なそうとする告子等と対立することになる。告子等の場合、人々の現実における生のあり方から帰納する形で「人の性」を考えようとするから、この場合は人々の表面にあらわれた「生のあり方」だけに注目すればよい。それに対し、孟子の場合はこのようなアプローチで「人の性」を考えることはできないから、「そのような生のあり方をさせているもの（孟子の場合は仁義を好み行うという生のあり方をさせているもの）」この内面にかくれている「性」に直接アプローチする方法を取るのである。それが内省による方法である。この方法により、人の現実における生のあり方を、内面にかくれている「性」にもとづくものともとづかないものに区分するという、内—外の区分の問題が性論の内に投げ込まれることになったのである。

第I編第二章《荀子の天人論》——本章では荀子の「性偽の分」を再検討し、それをもとに「天人の分」を見直す。

荀子の「性偽の分」とは、孟子の性論において生じた内—外の区分にかわる、現実における生のあり方の再区分である。従来しばしば誤解されてきたが、性偽の分とは先天的なものとは後天的なものとの区分などではない。先天—後天といった区分では、善に導く「偽（作為）」を行う素質や能力が先天的なものとして「性」の内に分類されてしまい、そのような素質や能力を持つ「性」がどうして悪と断定され得るのか十分に理解できなくなる。だが、荀子は、その性論を語るに際して、このような素質的なものに言及して自らの論理を混乱させるようなことはしていない。彼は、あくまで現実における生のあり方という現象のレベルにあらわれているものに止まって、それを「学んで身に付けたあり方」（＝偽）と「学ばずして身に付けているあり方」（＝性）とに分類し、その上で、彼が、悪と同義であると考えるところの乱の原因が「学ばずして身に付けているところの欲」にあるとして「性は悪なり」と断じている。彼は、性論を構成するにあたり、悪として顕在化してくるような潜在的なものや、善を行う素質的なものに踏み込んではいないのである。

この潜在的なもの、素質的なものといった、現象のレベルにあらわれていないものには踏み込まないという思考態度は、彼の天人の分においても貫かれている。従来しばしば誤解されてきたが、天人の分とは、自然現象の内に意図を読み取することを禁じ、自然現象に対し科学的合理的な態度を取ることを求めたものなどではない。自然現象に対して「どうしてそうなるのか」という問いかけをおこなって自然現象の背後にあるもの（意図や機構）に踏み込んでいってしまうこと、を禁じたものにすぎない。このことによって、荀子は、当時の自然観が有していた天人相関的な傾向を封じこめるのである。ここで、自然観というものを、①「自然現象に向い合う態度に関する部分」と、②「自然現象を解釈する方法に関する部分」とに区分するならば、荀子の天人の分とは、あくまで①の態度にかかわるものであり、自然現象を解釈する方法をも含めて当時の自然観を改変したものではない。よって、荀子が禁じていた、自然現象に対する問いかけが復活させられる時、当時の自然観が有していた天人相関的な傾向がまた吹き出してくることになるのである。この問いを復活させたのが他ならぬ董仲舒である。

第II編第一章《「成性の教」と「継天の立場」》——本章では荀子の性論・天人論に対する董仲舒の改変を述べる。

董仲舒は、性論において、荀子の性偽の分を読み替えて、「性」を完成させるものとして人の作為を位置付ける。この位置付けの結果、潜在的なもの、素質的なものに踏み込まないという荀子の思考態度が失われることになった。人の作為が「性」を完成させるものである以上、その未完成態たる「性」、このいまだあらわれていないものに作為者は言及せざるを得なくなるからである。董仲舒は、天人論においても、同様の読み替えを行う。荀子の天人の分を読み替えて、「天」の為したものを受け継いで完成させるものとして「人」を位置付けるのである。この「継天の立場」が、荀子において守られていた現象のレベルにあらわれているものに止まるという思考態度を失わせた。「人」が「天」の機構にのっとり、その作業を行わなければならない。「天」の為すことは、自然界においては自然現象としてあらわれてくるから、「人」は自然現象の背後にある意図や機構を読み取らなければならなくなったのである。この読み取りが行われる時、荀子の天人の分が押さえつけていた当時の自然観の天人相関的な傾向が再び吹き出してくるのである。これが所謂「天人相関説」である。陰陽刑徳説にせよ災異説にせよ、董仲舒はその天人相関説を語るに際して、あくまで当時の自然観を基盤として、そこに若干の修正を加えることによってそれを語っている。董仲舒が改変を加えたのは、上の自然観の二つの区分①の部分においてに過ぎないのである。そこで以下、当時の天人相関的思考に対する、董仲舒の改変のさまを見ることにする。

第II篇第二章《陰陽刑徳説》——本章では、董仲舒が陰陽刑徳説を語るに際して行った改変を検討する。

従来、陰陽刑徳説は董仲舒の創案にかかるものとされていた。ところが、馬王堆漢墓出土帛書の「経法」等四篇にすでにそれが説かれており、この説が董仲舒以前に存在するものであることが明らかになったのである。しかし、両者の説は同一ではない。

「経法」等四篇の説は儒家に対立する黄老家によって支持されていた説と考えられるが、それは、春に徳を、秋に刑を行うという「時令的思考」にもとづいて、刑徳並用を求めるものであった。この説の存在を前提として、董仲舒は、特異な陰陽の作用形式を提示することによって、その内容を、儒家の徳治主義に適合する形に変換しているのである。この変換は、通年における徳行を求めるという主張を陰陽刑徳説から導くものであるから、この説を「時令的思考」の縛りから解放するものであった。そして、この縛りからの解放がより広範な形で天人相関説を主張していく道を開いたのである。

第Ⅱ篇第三章《春秋災異説》——本章では、董仲舒が災異説を語るに際して行った改変を検討する。

『漢書』五行志に記された董仲舒の災異説を分析するならば、感応説と天譴説との間に比較的明瞭な使い分けが存在することが知られる。すなわち、ある種別の災異が起った理由を説明する場合に感応説が用いられ、特定の物が被災した理由を説明する場合に天譴説が用いられているのである。両者は相い補うものであり、何ら対立するものではない。いずれの説が董仲舒にとって本質的であったかを問う従来からの問いはここに解消されるのである。ここで、感応説については、董仲舒は当時存在した感応説を繰り返すに止まるが、天譴説については、災変を天罰と見る当時の天殃の思考を改変して、災異を天による勸告と見なし、その勸告を読み取る際に用いるべきテキストとして『春秋』を位置付けている。これは、災変を天罰と見る思考の存在を利用して、災異を通じて『春秋』の理念を天の勸告として為政の上に実現させようとしたものであり、儒家の台頭期にあたる董仲舒が儒家の立場を宣揚せんとする努力の一端であった。

第Ⅱ篇第四章《「天人の分」から「継天の立場」へ》——本章では、荀子から董仲舒への天人論の変化をより広い思想史的文脈のなかでとらえ直す。

董仲舒が天人の分を読み替え継天の立場に立った理由とは何か。一つは道家的立場からの性偽の分・天人の分への批判をふまえて、その批判を乗り越えつつ、人為による新たな治の枠組みを正当化しようとした点に求められる。荀子の後、道家的立場からは、性偽の分における「偽」を「いつわり」の義とし、儒家的な礼義やその人為の強調を人の「性」や「天」の自然に反する「いつわり」のものの強要であるとして批判する動きが起ってくる。この動きに対して、礼義が「性」にもとづくもの、「性」を完全に導くものであるとして、また人為が「天」を補完するものであるとして、董仲舒はその批判を乗り越えようとしたのである。ここに天人の分において排除されていた「天」への言及が復活するのであるが、そもそも、このような「天」への言及とは、その答えをもちや理論的に説明することができないような問いかけによって誘導されるものである。董仲舒にあってこのような問いとは、劉氏が天下を有しているという事実を説明せんとする問いであった。この問いに彼は「受命」の二字によって答える。この「天が命を授ける」という図式の下に天人の分が組み込まれたとき、それが継天の立場に改変されたのである。

さて、以上から天人論における董仲舒の「転換」について以下のことが言えるであろう。荀子にせよ、董仲舒にせよ、上に示した自然観の区分の①の部分における言及を行っているに過ぎず、当時の自然観を、その解釈の方法たる②の部分も含めて改変するようなことは行っていない。自然現象の背後に意図を認めるか否かといったことが問題となるのはあくまで自然観の②の部分においてであるから、その部分が改変されていない以上、荀子と董仲舒の間に、無意志の「天」から有意志の「天」へといった「転換」を求めるのは誤りである。よってそのような「転換」を想定し、その理由を問うようなものは、そもそも問いとして成立しない。ここに冒頭の課題が解消されるのである。董仲舒が現実に行ったのは、当時の自然観の上で語られている陰陽刑徳説や災異説的言説を利用して、儒家の主張を正当化せんとし、儒家の主張が現実化される手段を得ようとしたことに過ぎない。荀子と董仲舒の間に自然観の断絶を見出し、それを秦漢帝国の出現と直結して語るような思想史の記述は書き改められなければならないのである。

論文審査の結果の要旨

中国思想の特色として必ず挙げられるものの一つに「天人合一」があることからもうかがえるように、自然と人事の関係いかんを考察の対象とする天人論は中国思想の最も重要な研究領域の一つである。その天人論研究において、宋学と並んでピークをなしているのが先秦から漢代にかけての時期の天人論であるが、そこには一つ未解決の難問が横たわっている。それは「天人の分」から「天人相関説」への転換、すなわち荀子のいわゆる「天人の分」の思想が何故に、そしていかにして、一見対極にあるとも見える董仲舒の「天人相関説」に取って代わられたのかという問題であり、その究明は永年の懸案となっている。しかし、従来の研究では、漢代初中期の思想資料の欠乏もあって、ただその転換ないし逆転の事実を指摘するのみで、その原因あるいは転換の過程について十分な考察を行ったものはほとんどないままであった。

本論文は、董仲舒の天人思想の解明・分析を中心に、この難問に真正面から取り組んだ意欲作である。もっとも、論者のことばを借りれば、本論文は上述の課題の「解決」を企図するものではなく、むしろ課題の「解消」を目指したものであるという。すなわち、従来の「転換」という問題の設定自体が、換言すれば、荀子と董仲舒の天をそれぞれ無意志の自然的天と有意志の人格神的天という180度対極にあるものとみなし、両者の自然観を断絶せるものととらえる見方そのものが大きな問題を孕んでいるのではないかと論者は疑問を投げかける。このような不適切な問題設定を行ってきたのは、論者によれば、我々が思想分析にあたって持ち込む二元論的思考によるものであり、したがって古代の思想を読み解くには、常套的思考枠組みを取り去り、古代人の思考をあるがままに読み取らねばならない。

このような立場から、論者はこれまでの通念や解釈をいったん捨て去って、徹底したテキストの読み直しを行い、数々の注目すべき新知見を提出することに成功している。中でも白眉に数えられるのは、第Ⅰ編〈孟子と荀子〉第二章〈荀子の天人論〉と第Ⅱ編〈董仲舒〉第一章〈「成性の教」と「継天の立場」〉および第四章〈「天人の分」から「継天の立場」へ〉に見える以下の所論であろう。

荀子の性悪説における「性」と「偽」（人為）は、現実の「生のあり方」における「学ばずして身につけているもの」と「学んで身につけたもの」の区分を指すにすぎず、「性」を先天的あるいは潜在的な道徳的素質ととらえるのは誤りである。荀子はそのような素質的なものには言及しない。かかる「性偽の分」の基礎の上に立つ「天人の分」も同様の思考法、すなわち現象のレベルに現れていないものには踏み込まないという態度の表明にすぎない。荀子の「天人の分」を、自然現象の背後にある何物かの意志の存在を意識的に否定する科学的合理思想とみる従来の見解は、「自然現象に立ち向かう態度」と「自然現象を解釈する態度」とを混同した謬見である。

董仲舒は荀子の「性偽の分」を読み替えて、未完成の「性」を完成させるものとして「偽」を位置づけたために、「性」を一種潜在的な素質とせざるを得なかった。それゆえ、天人論においてもまた同様の読み替えを行わざるを得ず、「天」の為したものを受け継ぎ完成させる役割を担うものとして「人」を意義づけることとなった。その結果、「人」は自然現象の背後にある「天」の意志に目を注ぎ、ここに当時の自然観に一般的に内包されていた「天人相関説」が表面に顕現してくることとなった。つまり荀子があえて立ち入らなかった「自然現象の解釈」に董仲舒が踏み込んだだけのことであって、自然観そのものに根本的違いがあるわけではない。董仲舒は、「天」と「人」とをいったん区分した上で、「人」が「天」の意志を継ぐという「継天」の立場に立っているのである。

以上の所論は本論文全体の主張の骨子ともなっているが、極めて独創的であるとともにすこぶる説得力も備えており、従来の通説に根本的見直しをせまる斬新な見解と高く評価したい。とくに荀子は現象レベルにのみ関心を向けていたという指摘と、董仲舒の天人思想に対する「継天」なる規定は卓見と称するに足る。

また、馬王堆漢墓出土のいわゆる『黄老帛書』の「時令的天人相関説」が董仲舒の「陰陽刑徳説」に与えた影響を指摘しつつ、両者の基本的性格の相違を的確に描出した第Ⅱ編第二章〈陰陽刑徳説〉も、新資料を積極的に活用して思想史の空白を埋めた好論文であり、その他にも、たとえば同第三章〈春秋災異説〉における「天譴説」と「感応説」が『春秋』の経文の書き方によって使い分けられているという、これまでの研究の盲点を衝いた指摘など、本論文には随処に貴重な創見が見られる。なお、原文にはすべてにこなれた現代日本語訳が添えられていることも、特筆しておきたい。

このように本論文は、近來まれに見る学問的刺激にあふれた力作であり、論者の意欲的姿勢は尊重されて然るべきものと

思う。ただし、本論文は同時に大きな課題を自らのうちに抱え込んでいる。と言うのは、本論文で説いている「性」や「天」のとらえ方が中国古代思想全般に普遍的に妥当するかどうかにはかなり疑問が残るからである。荀子や董仲舒でうまくいったからとて、他の思想家すべてに通用するとは限らない。もし論者の解釈を強引に他の思想家にもあてはめるとすれば、それは論者自身が自ら設けた陥穽におちいることになるだろう。実際、そういった懸念は本論文のあちこちに感じられるのであり、とくに第Ⅰ編第一章〈孟子の性善説〉や附編Ⅱ〈もう一つの「天人の分」〉においてはやや強引さが目立つ。とくに前者においては、従来の通説を十分論破するまでには至り得ていない。

しかし、かような欠点や懸念は、論者が今後研究を進める中で克服すべき課題であり、本論文の達成した成果自体を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。1999年2月23日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。